

開催地名	新潟県南蒲原郡田上町
開催日時	令和5年7月7日（金） 9:30～11:10
開催場所	田上町立田上中学校
語り部	中野 雅嗣（新潟県長岡市）
参加者	田上中学校1年生、教職員、田上町総務課 74名
開催経緯	<p>昨年度、県と町の合同で行った防災訓練で町民や中学生の意識を高めることができ、それを継続したいと思ったから。（田上中学校校長）</p> <p>現在、当町では全ての地域に自主防災組織が結成されているが、活動のマンネリ化や高齢化等に伴い活動が停滞気味である。そこで昨年、新潟県・田上町総合防災訓練を実施した際に、田上町内の中学3年生から防災小説を作成してもらい、防災について考えたり、避難所運営に協力してもらったりと、地区と関わりながら防災教育の一環として活動していただいた。今後も切れ目なく防災教育を行っていき、今後の田上町を担っていく人材を育成すべく開催した。（田上町役場）</p>
内容	<p>今回は資料を見ながらのグループワークを中心に実施した。</p> <p>（1）地震が起きた時、どのような被害が発生するのか。</p> <p>身近なコンビニでの動画を例に、大地震発生時の動画を視聴した。何が起きていたかを生徒たちに発言してもらった。学校で行う避難訓練とは異なり、実際には身を守る場所がない場合があることを認識させ、『物が落ちてこない』『家屋や家具などが倒れてこない』『物が動いてこない』3つの『ない場所』で自分の身を守る必要があることを確認した。例として写真資料(寝室、キッチンの様子)を見ながら、何がどう危険なのか、強い揺れが起きた時にどのような行動をとればよいかを相談し、グループ毎に発表を行った。</p> <p>（2）災害発生後の救助や避難生活について。</p> <p>災害が発生してから取れる対策は意外と少なく、普段からの準備が大切である。通学路や学校等『もしここで地震が起きたらどうすればいいのか』をイメージすることで行動に活かせる。阪神淡路大震災で救出された約3万5千人のうち約2万7千人は地域の人によって救出された。生存者を救命できたのは地震発生から3日間がほとんどであった。これを黄金の72時間という。家屋が倒壊し道路が寸断される中、救出活動ができるのは家族や地域の人々である。一人一人が普段から備えておくこと、助け合うことが大切である。防災対策の3要素『自助』・『公助』・『共助』について、自分と家族が無事であることが他の誰かを助けることに繋がり、一人一人の自助が共助を高め、公助を必要な人に届けることにつながる。東日本大震災では体育館に入りきれず、廊下での避難生活を余儀なくされた被災者もいた。足の踏み場もない状況で移動ができず、日中も寝て</p>

過ごす人もいた。トイレの心配から、食事や水分を控える人がいた。災害関連死の約9割が高齢者であった。避難所は不幸な死者を出さないよう、皆で協力して支えあう場所であり、生活の再建に向けて心と体の準備をする場所である。

(3) 大切なのは想像力

避難所での生活を少しでも改善するために、小中学生たちはどのようなことを行っていたか。東日本大震災では、避難所内で新聞を作っていた。美味しかった豚汁の話等、毎日の『小さな幸せ』をまとめて作成、60日間継続された。大人が家の片付けを行っている間、子供たちは避難所で過ごし、年上の子が幼い子の面倒を見ていた。学校での掃除の経験を活かし、避難所の掃除を行った。トイレに行きたそうにしている高齢者には付き添いを行った。誰かに言われたわけではなく、小中学生たちが自分たちで考えて行動していた一例である。このような行動から大人は元気をもらい、多くの人が辛い避難生活を乗り越えることができた。災害時の避難所で小中学生にできることは沢山ある。一人一人が行動できるようになってほしい。



開催地より

中学1年生を対象に、災害時の「自助・共助・公助」の役割と大切さを伝えた。生徒たちは地域内共助が特に大切であり、地域の中で中学生の自分にできることに気付いた。意識を高めていくためには、継続的な防災学習が重要であると感じている。(田上中学校校長)

今回の講演で、生徒たちが災害を他人事ではなく自分事として捉え考え、日頃の防災意識の向上のためのいい機会になったのではないかと感じる。また、避難所運営の中で、「子供でも出来ること」「子供だから出来ること」を学ぶことができ、防災教育の重要性を改めて認識した。実際に災害派遣を経験された方の貴重な話を自身の経験とし、今後の防災体制づくりに生かしていきたい。(田上町役場)